

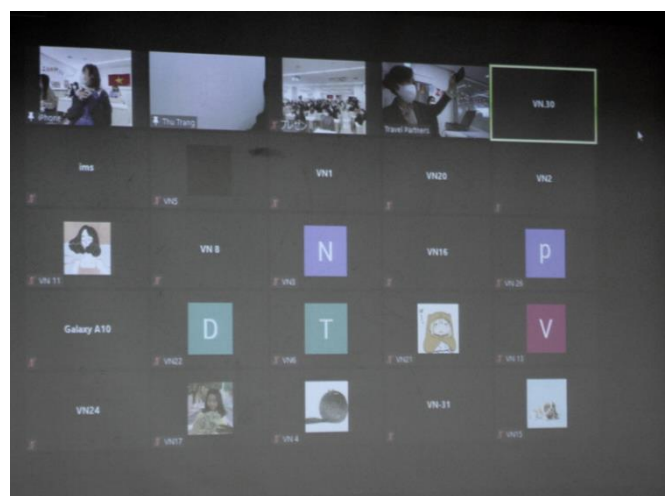
## コロナ禍 日本とベトナムのオンライン交流

### ハノイ大学/日本語日本文化コラボレーションセンター&横浜国際看護専門学校

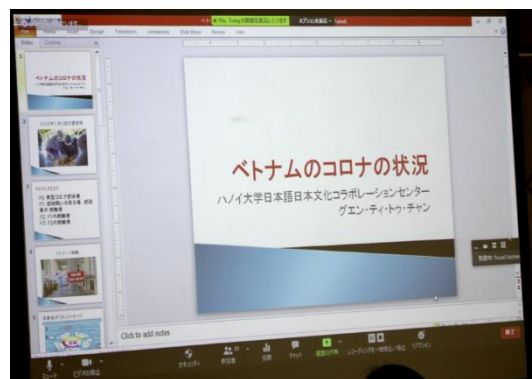
2021.2.24~26

2021年2月24日(水)~26日(金)の3日間、IMS 横浜国際看護専門学校は、ハノイ大学日本語日本文化コラボレーションセンターの協力で、『日本にいながら海外研修&国際交流』のイベントを開催いたしました。IMS 横浜国際看護専門学校は、学生たちに異文化理解を深め、広い視野での看護を提供できる看護師になってもらいたいという深い思いがあります。通常ならば、海外研修を行い、現地での交流を通じて、異文化理解を体得するのですが、昨今のコロナ事情により、なかなか実現できません。それもままならぬ今回のこの大きなイベントを実施する運びとなりました。企画・手配はトラベル・パートナーズですが、教員の方々の熱い思いや、関係各所の協力なしでは実現できない、初めての試みとなりました。学生たちは、事前学習を経て今回の3日間のイベントを体験しました。その2日目は、ベトナム Day。ベトナム料理のランチを食べたり、ハノイの旧市街や軍事博物館を動画で紹介したり、ハノイ大学とオンラインの国際交流を実施いたしました。ここに、ハノイ大学の日本語を勉強している学生とのオンラインでの国際交流の様子をお伝えいたします。

ベトナムハノイでは、ちょうどこのイベントの数日前に新型コロナウイルスによる死者が出て、急遽ロックダウン状態に。当初予定していた、通信環境の整った大学に、学生が一堂に集まってZoom にエントリーして交流するという方法が、とれなくなりました。それでも、何とかしてこの交流をやり遂げるため、学生各自が『ステイホーム』中に、自宅でエントリーしてつなげる方法へ切り替えました。通信環境の不安定さへの懸念もありましたので、ハノイの学生たちは、各自の画像を出さないで、節約通信モードでの開始となりました。日本サイドの学生は一つの大画面を見ながらの交流です。

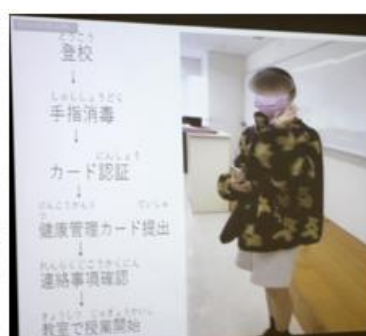
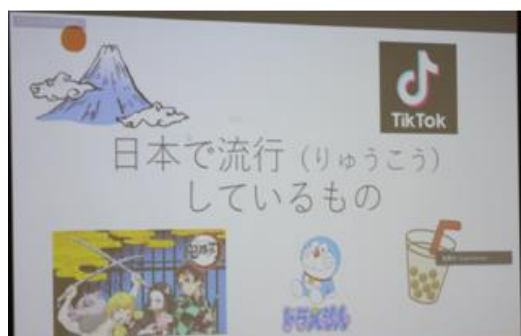


まず初めに、ハノイ大学日本語・文化コラボレーションセンター所長のフォン先生よりご挨拶をいただき、次に担当者であるチャン先生に、ベトナムのコロナの状況についての説明をいただきました。お二人は、大学にいらっしゃったので画像付き。日本サイドの学生さんたちは、お二人のきれいな日本語に少し驚いていたと思います。



ていたと思います。

次に、日本側の学生2~3グループがプレゼンテーションを行います。少し緊張しながらも、日本で今流行している歌や、アニメ、トレンドの紹介や、学校生活の1日を動画に撮影したりと、各グループが一生懸命パワーポイントを工夫して作成



し、頑張りました。

日本側のプレゼンテーションが終わると次は、ハノイ側の学生からのプレゼンテーションです。ハノイ大学での学生生活や行事、民族衣装のお話、アオザイを今の流行に取り入れたファッションについてなど、とても流暢な日本語で説明してくれました。大学生生活の紹介の中で、ハノイ大学の学生が机にひれ伏して寝てしまっている画像が出ると、日本の学生からはつい、笑みがこぼれます。アオザイを今風に着こなしたファッションの紹介では、女性から『わあ〜』っという声が漏れます。『素敵! 私も着てみたい』と思った瞬間かな? 国が違えども、学生は皆一緒。双方に共通するこの共感がとても大切ではないかなと、ふと感じた場面でした。



お互いのプレゼンテーションを終えると、双方に事前に配布してあった番号札を使って、ランダムに学生を当てて、双方でキャッチボール式に Q&A。いつ当たるかわからない、ドキドキ感を味わいつつ、質問と返答のやり取りが続きました。ハノイ大学の学生は、本当に日本語がクリアで上手。皆一生懸命努力して日本語を習得しているのだということに、日本側の学生たちも何か感じるものがあったはず。とはいえ、お互い顔もよくわからず、このままお別れでは、なんだかさみしい。ということで、最後に、日本側の大画面の前に学生が集まって、画面を囲んで写真を撮ることに。この時だけは、ハノイ大学の学生も顔出しました。相手側の画像が出ると、日本側の学生たちは大盛り上がり。ハノイ大学の学生は、本当にかわいらしく、おしゃれで、何も日本人の学生と変わらない。やはり百聞は一見に如かず、お互いの顔が見えると、ついついはしゃぎたくなるものですね。オンライン接続がダウンすることもなく、和気あいあいとした雰囲気の中、全員で集合写真を撮って、手を振ってお別れ、無事終了しました。

やはり、交流は、顔が出ているとますます相手を知りたい、理解したいと思える、こうして、お互いに歩み寄って、次回は現地で、対面で会えたら素敵だなと、皆が感じた時間となりました。

レポート:株式会社トラベル・パートナーズ

>